

霍公鳥と時の花とを詠む歌一首 并せて短歌

四一六六番

時ごとに いやめづらしく 八千種に 草木花咲
鳴く鳥の 声も変はらふ 耳に聞き 目に見
るごとに うち嘆き 萎えうらぶれ しのひつつ
争ふはしに 木の暗の 四月し立てば 夜隠りに
鳴くほととぎす 古ゆ 語り継ぎつる うぐひ
すの 現し真子かも あやめぐさ 花橘を
娘子らが 玉貫くまでに あかねさす 昼はしめ
らに あしひきの 八つ峰飛び越え ぬばたまの
夜はすがらに 暁の 月に向かひて 行き帰り
鳴きとよむれど なにか飽き足らむ